



# 教養と人間性

広島中央保健生活協同組合 生協さえき病院内科

岡田 浩 佑

キーワード：究理実践，リベラルアーツ，精神的自立，人間性

## I はじめに

筆者が在籍した広島大学の理念は、医学部の4年先輩で耳鼻咽喉科医師であった原田康夫先生が、広島大学学長を務められた時期に作られた「原田5原則」と称していたのが、大学の理念となっている。その5原則は下記の通りである。

- 1) 平和を希求する精神
- 2) 新たな知の創造
- 3) 豊かな人間性を培う教育
- 4) 地域社会・国際社会との共存
- 5) 絶えざる自己変革

1999年に呉大学（現在、広島文化学園大学と名称変更）の社会情報学部看護学部が増設されて呉市の阿賀キャンパスで看護学教育が展開されることになった。広島市内の長束キャンパスには短期大学があるが、この学園の建学の精神は「究理実践」である。筆者は広島大学原爆放射能医学研究所内科部門で米国癌部門留学を含む研究生生活15年半、広島大学病院診療支援の輸血部で16年半、この間に医学、歯科学、薬学学生の講義をした。文部教官の定年の5年前の58歳時に、広島大学医学部に保健学科が増設されて、看護、理学療法、作業療法のコメディカル教育に従事することになり、退官後に74歳まで呉大学看護学部の教育に11年間従事し、その後も80歳まで短期大学食物栄養学科の解剖生理学の講義を担当したため、20年余もコメディカル教育に関与した。76歳から高齢被爆者の特別養護ホーム診療所に6年間勤めて、自分の専門外の日本老年医学会に入会して以降、老人病・老年医学にドップリ浸かる生活を続けることとなった。自分の辿って来た道を振り返り、自己点検・自己評価すると、自然に5原則に沿った生き方となっていることに気がつく。

## II 中国人の学校で身につけた貴重なもの

呉大学での最終講義「私と教育と診療と研究」<sup>1)</sup>を看護学統合研究に掲載していただいたが、朝鮮戦争当時の14歳から17歳まで中国奥地の黄河の上流の鉄路中学で、日本語の読み書きの全く無い学生生活を送った。3年間の中国語での教育で身につけたのは、中国語で「实事求是」（事実に基づいて真理を追究すること）、「連関性」（何事も基礎から積み上げる必要がある）の重要なこと、「個人英雄主義」（他人を押しつけて自分だけ頭角をあらわそうとすること）と「単純技術観点」（広い教養でなく狭い知識のみにとどまること）を戒める4点であった。この時期に、教養や人間性ということに関しては、ほとんど考

連絡先：岡田 浩佑

〒731-0235 広島市安佐北区可部町勝木1248-66

E-mail: kosokada@gmail.com

えたことがなかった。

毛沢東の「実践論・矛盾論」という小冊子を読んで、「本は逃げない」という言葉に出会った。中国の田舎ではブタやニワトリは放し飼いなので、囲いこんで捕えて肉料理にするまで手間がかかるが、本はいつでも読むことができ疲れたら閉じて、また開いて読むことができる。物作りの人に比べて本読みの知識人が特に偉いということはない。教師は年齢に無関係に「老師」と呼ぶ。農民も日本では「お百姓さん」だが、中国では「老百姓（らおばいしん）」と敬意を込めて呼ぶ。敗戦後8年経った昭和28年に、中国奥地の蘭州から西安、武漢、南京、上海を経て舞鶴に上陸した。広島に帰り着き、親子3人が居候したのは母方の叔父の高等学校校長官舎であった。5月なので、夏休みが済んで2学期から登校するようにいわれて、家でぶらぶらしている時に、叔父の養父から囲碁を教えていただいた。高川格本因坊の座右の銘が「流水不争先（流れる水は先を争わず）」だった。自然の流れに沿って、これまで自然体で生きてきたように感じる。

小さい頃から周りの人たちに「勉強しろ」といわれたことはないが、帰国して無試験で高校2年に編入学した時、担任の先生に教員室に呼ばれて、「勉強するな、そんなに勉強したら28歳までしか生きられないぞ」といわれた。生まれて初めて「勉強するな」といわれて本当にびっくりした。同級生が昼休みの時間に外で遊ぶのに一人だけ図書室で本を読みまくっていたので、いかにも勉強しているように同級生が勘違いしたのであろう。

飢えたオオカミが餌に恵まれたような、暑い夏の砂浜に水を落とせばたちまち吸い取られるような、日本語の本に何年ぶりに巡りあえて、ガツガツ本を読み漁った。大連市で生まれ育っていた頃、小学校4年生の時に敗戦を迎えたので、国語の基礎教育はそれまでにある程度できあがっていた。小学校は中国人の小学校になり、学校のない時期には貸本屋でもっぱら大人の本を読んでいた。源平盛衰記や吉川英治の大衆小説、講談社の漢字にひらがながふってある宮本武蔵、太閤記、三国志などを読んでいた。帰国後高校の図書室では夏目漱石の「我が輩は猫である」「坊ちゃん」や外国のアレクサンドル・ジューマの「三銃士」などを読んだ。小さい頃に読んだ「ああ無情」は実はヴィクトル・ユゴーの「レミゼラブル」というとか、「巖窟王」は実はデュマの「モンテクリスト伯」ということを知った。ホーソンの「緋文字」という本を読み眠れなくなったことがある。

中国から帰国した時に、当時日本では55歳が定年であったが、父親は56歳になっていた。もう少し若い鉄道マンは国鉄に採用されたが、父親は職業安定所（現在のハローワーク）に通ったが1年間職がみつからなかった。1949年に毛沢東が天安門で中華人民共和国の成立を宣言し、朝鮮戦争がやっと終結を迎えて帰国できた状況では仕方の無いことだった。「アカ」を毛嫌いの日本では当時の中国からの引き揚げ者は皆同じように苦勞した。やっと午前4時半から午後の11時半まで働く製缶工場の乾燥機を扱うボイラーマンの仕事についたので、親に世話にならずに高校卒業後すぐに働くことを考えていた。しかし、卒業後の就職先が決まる同級生の中で、銀行マンや三菱造船そのほか大きな会社への就職は望み薄で、夜の街のスタンドか何かでカクテルでも作るボーイになるくらいかも知れないと考えていた。母方の叔父の息子で1歳年下だが同じ高校の同級生であった従兄弟が、東京大学の法学部の受験を目指していた。頭の出来がそう悪くないことを知っていた叔父が父親に大学に進ませないのかと盛んに言っていたらしく、父親から突然大学に行くかと問われた。嬉しくなって自分も東京に行けるのかと思ったら、「広島でできん奴が東京で何ができるや」といわれた。同級生が無医村では聴診器一本で生きていけるぞと言ってきて、実母と継母の二人を幼少時に結核死で失っていたので医師になることを考えたが、父親は工学部の4年間くらいなら支えることができると考えていたようだが、医師になるのには通常の4年ではなく6年かかり、さらにインターンが1年かかることを聞いて受験に「落ちてこい」と言った。運良く医学の道に進むことができ、卒業後1年間の医学実地修練生を終えたら、広島市内の医療機関ですぐに収入の得られる勤務医になることを考えていた。日本育英会の奨学金やいろいろなアルバイトをして親の世話になるべくならないような生活をした。

### Ⅲ 平和を希求する精神について

死ぬ人を助けたいと医師になる道を選んだが、幸か不幸かインターンを終えた時に、医学部同級生は皆、各講座の大学院生になるなど次の進路が決まっていた。親に負担をかけないために岡山県の津山市の津山中央病院でインターンをしていた筆者と、同様に父親を早くなくして、九州の小倉記念病院でインターンをしていた二人だけ残っていた。広島大学原爆放射能医学研究所（現在、広島大学原爆放射線医科学研究所と名称変更、略称、原医研）に被爆内科と被爆外科（後に、原医研内科と原医研外科）が増設されて4月から外来・入院患者の診療が始まることになり、助手になる者を探していた。そのため、二人ともすぐに内科の助手になり収入が得られるようになった。広島は原爆のため全国平均より10倍白血病が多い時代であり、抗白血病薬は乏しく、感染、出血、栄養対策も遅れていたため、急性白血病患者は1年以内に全員死亡という悲惨な状況であった。

被爆者対象の医療から研究・診療生活を開始したが、最初の恩師は長崎大学出身で、「長崎の鐘」の歌で有名な長崎の原爆の時に、慢性骨髄性白血病で脾臓が腫大した進行状態にもかかわらず被爆者医療に尽くした放射線科の永井 隆医師の主治医を務めた先生であった。染色体研究を担当した同級生は1万7千件の染色体検査、原爆後障害研究の生き字引的存在となり非常な業績を上げた。筆者は白血球酵素の研究で酵素学と免疫学の両領域の研究から始まり、京都大学出身の2代目教授の指示で米国癌部門に留学し、帰国後造血器悪性腫瘍の白血病や悪性リンパ腫の治療成績の向上、白血病動物モデルによる基礎研究などを行い、京都大学出身の3代目の教授の指示で輸血医療や造血幹細胞移植など、全ての医療活動の範囲が、死ぬ人を助けるという希望通りになったという幸運に恵まれた。

米国から帰国直後の1971年末から当時の広島記念病院の病院長の要請と教授の指示により、2012年3月末まで、41年間同病院の血液疾患コンサルテーションを務めた。その時期に広島原爆被爆者検診で、急性骨髄性白血病と診断された76歳の高齢被爆者の診療をした。38歳の時に、広島市の原爆の爆心地から900メートルの屋内で被爆した患者で、主に外来通院で治療して78歳で逝去された。同じ場所の屋外で被爆した3歳の女児が母親の付き添いをしていたが38歳になっていた。54歳の時に被爆者検診で骨髄細胞の染色体異常を伴う骨髄異形成症候群の前白血病状態がみつき、68歳で白血病に転化し70歳で逝去された患者の診療も引き受けた。逝去される4年前に「もみじの手」という被爆体験記を広島原爆死没者追悼平和祈念館の図書館に寄贈された<sup>2)</sup>。

広島市の原爆被爆者援護事業団に所属する特別養護ホームの診療所所長を引き受けたが、全国の中学校から年間6校くらいの中学生在が慰問に来て下さり、入園者から直接被爆体験を聞く平和学習を実施している。引率教員に「もみじの手」のコピーを渡して中学生に回し読みして貰っている。また、広島市の被爆2世の医師が世話する会がある。広島市医師会会館で、医師会附属の准看、正看コースの看護学生や高校生に対して原爆被爆を継承する会を開いている。その参加者へも「もみじの手」を配布し読んでもらっている。日野原重明先生は75歳以上の人を対象に「新老人の会」を立ちあげられて、「若い人たちに命と平和の大切さを伝えること」を使命とされた。原爆の地の広島に住みながらできることは僅かである。

実践や実行力の優れている日野原重明先生は偉いと思った。広島大学病院の会議室で医学部教授たちが子供の「いじめ」の問題について、広島大学の教育哲学の専門家と幼児保健学の教授（呉大学看護学部の学長補佐を務めた小児科医の清水凡生先生）を呼んで話を聞いたことがある。特に良い対策が聞けなかったが、日野原先生は小学校の4年生を対象に、聴診器で自分自身と相手の心音を聴かせる「いのちの授業を」行なっていた。日本各地で日野原先生と同様の「いのちの授業」が展開された。呉大学、広島文化学園大学の建学の精神の「究理実践」、筆者の最終講義にも記述した英国帰りの恩師に伝えられた「See and Do」のように何事も実践に踏み出すことが大切である。

### Ⅳ 新たな知の創造について

アインシュタインのように紙と鉛筆で全く新しいものを生み出すのと違って、われわれは経験したものを通じて新しく国際貢献できるものを生み出す。広島大学原爆放射能医学研究所の原医研内科（現在、



血液腫瘍内科部門)の2代目教授に、米国癌部門から帰国後に国内外にないラットの全身型白血病モデルを作製して癌治療の基礎研究をして世界に貢献することと、造血器悪性腫瘍の治療のチームリーダーとなり、当時急性白血病の5年生存率が10%以下であった時期に5年生存率を50%以上にするように指示された。

いずれの目標も約5年後に達成出来る道筋ができた。研究面では、同級生の病理学者から化学発癌物質で誘発した純系 Wistar/Furth (W/Fu) ラットの白血病細胞を頂いて、腹部大動脈から白血病細胞を採取して尾静脈から移植できる Rapid Growing (RG) と Slow Growing (SG) の動物モデルを作り、抗癌化学療法や癌免疫療法の研究を行なった<sup>3-5)</sup>。広島大学病院に正式に承認された輸血部の最初の責任者となり、輸血医療の基盤整備、輸血医学の研究を進めると同時に、二足の草鞋でヤクルト中央研究所の新規な細胞毒性抗癌剤の開発に協力できた。そのきっかけとなったのは身内の癌患者による。

筆者の姉の夫が54歳の時に癌性腹膜炎で胃癌が再発して、尿が一滴も出ない状態が出現しループ利尿薬のフロセミドのほか利尿薬も全く効果が無く急性腎不全(尿毒症)で死ぬのを待つばかりの状態となった時に、大根草という利尿効果があると伝え聞いている和漢薬の服用が著効を示した。ヤクルトの中央研究所が、植物アルカロイドの Camptothecin (CPT) 誘導体で、副作用がなく抗癌効果のあるものをマウスの前臨床試験で見いだしたという発表を見つけた。研究所の所長、主任研究員らに会って共同研究を始めることができた。癌学会で副作用が無いと報告された誘導体はラット白血病モデルでは下痢があり、次に送られてきた誘導体は下痢がなくなっていたが、抗腫瘍効果が小さかった。三番目の誘導体の CPT-11 は下痢もなく、体重減少もなく、抗腫瘍効果は素晴らしかった<sup>6)</sup>。

実は、この CPT というのは、中国の中草薬の喜樹(学名 *Camptotheca acuminata*)に抗癌作用のあることは1930年頃に分かっていた。米国の薬草園に喜樹を植え継いで Wall & Wani が1966年にその抗癌作用を有する物質の化学構造を突き止めて Camptothecin と命名したのである。中国では中草薬が主に昆明のあたりで収集されて上海において分析されていた。日本から上海の研究所を訪問すると、7700種の植物の中で喜樹が有効な抗癌物質を含むという説明を受けている写真を筆者の最終講義<sup>1)</sup>に示したが、「現代中国の癌医療」<sup>7)</sup>という書物にも喜樹についての説明が最も多い。筆者が米国留学を目指した時期は、米国はベトナム戦争のおかげで、実験研究だけの日本人研究者を採用する余裕がなく、米国で医師として診療に従事できるように資格試験に合格していることが必要条件であった。日本の医師国家試験のような基礎と臨床医学の全領域の2日間の合格点が75点の厳しい Educational Council for Foreign Medical Graduates (ECFMG) の試験に合格できた。米国で師事した恩師は Thomas C. Hall 先生で、New York 州 Rochester 市の Rochester 大学医学部癌部門の Director であり、米国の東部からカナダにかけての20医療機関の大きな臨床研究グループの Chairman であった。主要な基礎研究の課題は薬学者で Associate Professor の David Kessel 先生らとの喜樹から抽出された抗癌植物アルカロイド CPT 誘導体のマウス腹水型白血病モデルを用いる前臨床試験と作用機構の研究であった。しかし、米国では開発が成功せず、日本で開発が成功した。

CPT-11は抗癌剤として有効であろうと推測できた。その後は留学前から知っていて、Philadelphia市の米国癌学会やHouston市の国際癌学会で親しく話のできた Roswell Park Memorial Institute (RPMI) (現在、Roswell Park Cancer Institute と名称変更)の蓑和田淳博士が樹立したヒトT細胞性白血病培養株を用いた高度耐性株作製や、また、葉酸研究の第一人者であった Yale 大学の Bertino 教授とも親しく話ができて、葉酸代謝拮抗薬の抗癌剤 Methotrexate に対する高度耐性が、律速酵素の Dihydrofolate Reductase の DNA 塩基の one point mutation によることを知っていたため、Topoisomerase 阻害薬を抗癌剤のカテゴリーに加える国際貢献ができた<sup>8-12)</sup>。

## V 豊かな人間性を培う教育について

米国留学を含む研究生活から診療支援の輸血部、さらにコメディカル教育から老人病の世界へと、1枚の葉っぱが川に落ちて、周りの景色の移り変わるのを眺めているような生活を過ごしたため、自然に絶えざる自己変革が出来たように感じる。

広島大学では教育改革の一環として教養教育の改革を目指して、各学部から、教授、助教授・講師、助手の代表を選び、本部のある東広島市のホテルに1泊させて、各学部混成チームを作り、教養とは何かをグループ討議する機会があった。「教養とは」という問いに対して、筆者が「自分の頭で考えて生きる力を養うこと」と発言したら、同席していた広島大学の副学長で教育哲学の専門家から、「医学部の教員は何と教養がないことか」と言われたことが、今でも耳底に残っている。それもそのはず、その教育哲学専門家はヨーロッパに留学して、ギリシア、ローマ時代からの伝統的な欧米のリベラルアーツの本場を経験しており、どの領域の仕事に進むとしても、基礎として自由人になるための自由7科が何かを知っており、算術、幾何学、天文学、音楽、文法学、修辞学、論理学を修めるのと同様に、現代では大学卒業の時には数名の教授の前に一人ずつ呼び出されて、社会、政治、経済、哲学、宗教、芸術、科学、歴史など何を質問されても自分の考えを堂々と述べる能力があること、それが教養人であるという。広島大学では教養教育にバランスの取れた教養科目のようなものを作成して、1年間試行して学生に問うたところ、あまり評判が芳しくなく、ただ数名の学生が1名の教員について教養ゼミと称した授業だけが評判が良かった。ただし、学生の感想の中に教養ゼミを担当するのに適さない教員がいるというのがあった。

広島県の湯崎英彦県知事が「広島県を日本一の実験県にしよう」という目標を表明して、広島県教育委員会が2016年に主要施策実施方針を作成した。「広島県で学んで良かったと思える日本一の実験県の創造」の中には、どのような人を育てたいのか明確に示されてはいなかった<sup>13)</sup>。

2002年7月に逝去されたジャーナリストの草柳大蔵氏の「絶筆日本人への遺言」<sup>14)</sup>の中に、「意味のある人をつくるために」という記述がある。静岡県石川嘉延知事が1998年に「静岡県民づくり百年の計委員会」というのを立ちあげて、その委員会の会長が草柳氏であった。人造りは国づくり、国家の根幹は「教育」にありと、一に教育、二に教育と教育論に熱心であった人たちの提言の「意味のある人」とは、次の三条件を備えている人である。一つ、なにかができる人、一つ、精神的に自立している人、一つ、思いやりのある人という。

お釈迦様よりも先に生まれた中国の孔子の言葉に、「君子は和して同ぜず、小人は同じて和せず」というのがある。君子は教養人、小人は知識人という解釈もある。学問を愛する人は協調するが自分の考えをはっきりと持っている人で、簡単に付和雷同しないという。出口治明氏の幻冬舎新書の、「人生を面白くする本物の教養」<sup>15)</sup>という本と、「自分の頭で考える日本の論点」<sup>16)</sup>という本があり、後者には22の論点について基礎知識と自分の頭で考えるが述べられていて参考になった。

米国で暮らしてみて、小さい頃から自立、勤勉、正直と子育てするのに比べると、日本では哺乳動物よろしく、かなり長く添い寝をして、あまり自立といわず、むしろやさしさ、いたわり、思いやりのある子を育てようとする。最近、テレビの「YOUは何しに日本へ」という番組で、ポーランドの男の若者が、日本のラーメンが好きで博多の評判の店で3日間修行するのを見る機会があった。店長ほかスタッフが懇切丁寧に自分たちの蓄積してきたものを惜しみなく全部伝授する姿を見て、なんとやさしい人たちかと感心した。天台宗の開祖の最澄（伝教大師）の「一隅を照らす、これ国の宝なり」の言葉が浮かんだ。

20年近く教育に従事してきたが、幸福感が世界で有数のフィンランドに関して、岩竹美加子氏の新書「フィンランドの教育はなぜ世界一なのか」<sup>17)</sup>には、テストも偏差値も受験もないのに、それで勉強ができるって、どういうことか、その秘密が詳しく書いてあった。結局、教育費無償の国で、のびのびと勉強して、教えられる態度を捨てさせることができれば最高の教育と言うことであろう。

## VI おわりに

実は「国家と教養」<sup>18)</sup>という数学者の藤原正彦氏の本がある。「国家の品格」<sup>19)</sup>の本で有名になり、「日本人の誇り」<sup>20)</sup>という本も出版された。いずれも非常に詳しく、日本の敗戦後の日本人の心を奮い立たせる良書で広く読まれている。大学で教養ゼミという講義もされて、とにかく本を読むことを勧めている。米国のトルーマン大統領は一流の教養人だったと思うが、広島、長崎に原爆投下を命じた。教養人

でも豊かな人間性の持ち主かどうかが問題である。この小論を作成中に、2024年ノーベル平和賞を被団協（被爆者団体協議会）が受賞の報道があった。「もみじの手」を書き残した白血病死した親子を含め、多くの被爆者の長年の No More Hibakusha の努力が報われた。

医療従事者の道一直線、柔道一直線、ラーメン道一直線でもなにかができる人であり、自分の頭で考えて、優しさ、いたわり、思いやりのある人であれば良い。呉大学から広島文化学園大学に変わったが、建学の精神の「究理実践」は簡潔で良い言葉であり、広島大学の理念の一つの「豊かな人間性」は、岩清水の自然に恵まれた国に生まれた、良いキーワードであると改めて思う。

## 文 献

- 1) 岡田浩佑：私と教育と診療と研究 看護学統合研究 12(1)：1-23, 2010.
- 2) 岡田浩佑, 鎌田七男, 藤村欣吾ほか：広島で近距離被爆後に長期間を経て白血病を発症した母娘例 広島医学 67(4)：396-400, 2014.
- 3) Okada K, Teratani M, Takahashi A et. al: A rat myeloid leukemia model of human disease. Hamatological characteristics of N-Nitrosobutylurea-induced W/Fu rat myeloid leukemia. Acta Haematol. Jap. 40: 72-86, 1977.
- 4) Okada K, Teratani M, Takahashi A et. al: Variability in differentiation stages observed in a rat myeloid leukemia and its relation to human myeloid leukemia. Acta Haematol. Jap. 40: 87-106, 1977.
- 5) Okada K, Teratani M, Takahashi A et. al: Chemotherapy of N-Nitrosobutylurea-induced W/Fu rat myeloid leukemias. Acta Haematol. Jap. 40: 107-118, 1977.
- 6) Okada K, Mizutani A, Kusunoki Y et al: Antileulemic effects of CPT-11 (a new derivative of camptothecin) on rat leukemias and the isolation of resistant human leukemic cells. Kimura K, Ota K, carter SK, Pinedo HM Ed.: Cancer Chemotherapy, Challenges for Future Vol.4. International Congress Series, Excerpta Medica, Tokyū, 1989, p312-316.
- 7) 近藤宏二監修 杉 充胤翻訳：現代中国の癌医療. 自然社1977.
- 8) Andoh T, Ishii K, Suzuki Y et al: Characterization of a mammalian mutant with a Camptothecin-resistant DNA topoisomerase I. Proc Natl. Acad.Sci. USA, 84: 5565-5569, 1987.
- 9) 安藤俊夫, 岡田浩佑, 小黒昌夫：哺乳類 DNA トポイソメラーゼの生物機能とその癌化学療法における意義 癌と化学療法54：1-14, 1988.
- 10) Tamura H, Kohchi C Yamada R et al: Molecular cloning of a cDNA of a Camptothecin-Resistant human DNA topoisomerase and identification of mutant sites. Nucleic Acids Research, 19(1): 69-75, 1990.
- 11) Andoh T, Tamura H, Kohchi C et al: Mechanism of camptothecin resistance in Mammalian cells: mutation of topoisomerase I gene and its implication in enzymatic function. Andoh T, Ikeda H, Oguro M Ed.: Molecular Biology of DNA Topoisomerases and Its Application to Chemotherapy. CRC Press Tokyo 1992, p229-235.
- 12) 岡田浩佑, 安藤俊夫：トポイソメラーゼ I. II とその阻害剤. 化学療法の領域. 医薬ジャーナル. 9：221-228. 1993.
- 13) 岡田浩佑：「教育は日本の命」を論ず. 看護学統合研究. 19(1)：32-39, 2017.
- 14) 草柳大蔵：絶筆日本人への遺言. 海竜社. 2004.
- 15) 出口治明：人生を面白くする本物の教養. 幻冬舎新書. 東京. 2015.
- 16) 出口治明：自分の頭で考える日本の論点. 幻冬舎新書. 東京. 2020.
- 17) 岩竹美加子：フィンランドの教育はなぜ世界一なのか. 新潮新書. 東京. 2019.
- 18) 藤原正彦：国家と教養. 新潮新書. 2018.
- 19) 藤原正彦：国家の品格. 新潮新書. 2005.
- 20) 藤原正彦：日本人の誇り. 文芸春秋. 2011.